実践報告

臨床美術的なアプローチを造形活動に生かす実践研究

牛丸　和人

（西九州大学短期大学部　幼児保育学科）

（令和５年１月６日受理）

A Practical Study of Applying a Clinical Art Approach to Art Activities

Kazuto USHIMARU

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted January 6, 2023)

Abstract

Many preschools, kindergartens, certified kindergartens, and elementary schools tend to emphasize the importance of teaching and evaluating expressive techniques in their plastic arts activities. In some cases, the opposite is true, with a laissez-faire approach to instruction. In plastic arts education, it is necessary to “empathize with children’s thoughts,” “stimulate the right brain,” and “incorporate rich dialogue to enhance self-esteem (sense of self-existence),” according to children’s characteristics and developmental stages. Here, I will introduce workshops of plastic arts activities that incorporate a clinical art approach for children and instructors.

Keywords:　臨床美術的なアプローチ：clinical art approach
保育内容（造形表現）：childcare content (plastic expression)
造形遊び：modeling play
図画工作：drawing and painting
指導者の資質向上：improvement of instructor’s qualities

1　研究実践の目的

・園児、小学校児童への臨床美術的アプローチを生かしたワークショップを実施することにより子どもの自尊感情を高める。
・保育士や幼稚園教諭に対するワークショップを通して、臨床美術的アプローチを生かした造形活動への興味関心を高め造形教育に係るスキルアップにつなぐ。

2　研究の特色（位置づけ）

⑴　臨床美術的アプローチとは

筆者は日本臨床美術協会のセミナー及び実技講習を受講し、2020 年 11 月に臨床美術士 5 級の資格、2022 年 10 月に臨床美術士 4 級の資格を取得すると共に臨床美術学会（The Society for Clinical Art）の会員として臨床美術の実践を継続している。臨床美術的アプローチとは、モダンテクニックの技法を応用した造形活動を通して、右脳を刺激し五感を通した言葉かけを工夫することによって参加者の自尊感情を高めるワークショップを指す。今回は児童、生徒や保育士、幼稚園教諭それぞれを対象としたワークショップを実践する中で、それぞれの効果を検証した。

3　ワークショップの実際

⑴　園児、児童に対する実践

①　放課後児童クラブ　児童発達支援・　放課後等デイサービス」ippo に通級する園児、児童（6 名）対象

・実践日：令和 4 年 10 月 23 日㈰

放課後デイサービスに通う子どもたち（6 名）を対象に実施した。参加する子どもたちは自閉症、ADHD 等の診断を受けているため、それぞれに ippo のスタッフが付き添い、ゼミ生 4 名もサポーターとして参加した。プログラムはクレパスや割り箸を使った造形遊びを行った。

ア　ワークショップの内容

「元気な木」という題材で画用紙にクレパスと割り箸を使ってスクラッチングすることによって抽象的な木を表現する。指導者や支援員は技法指導ではなく、子どもたちの表現を全て受容しながら五感を生かした言葉かけを行いながら支援する。

イ　子どもたちの反応

活動の流れの説明に対する理解度に差が見られたため、個々の理解度に応じた支援を行った。それぞれの子どもの障がいの程度が異なるために描こうとしない子どももいると予想していたが、どの子どもも高い関心を示し、子どもの表現を全て受容しながら言葉かけをすることによって制作への意欲が増し、2 枚完成させた子どももいた。

図１　「元気な木」完成作品の一部

図２　二枚目の制作に取り組む児童

②　幼保連携型認定こども園「おへそ子ども園」の園児（18 名）対象

・実践日：令和 4 年 8 月 25 日㈭

おへそ子ども園の園児（17 名）と放課後児童クラブに通う児童（1 名）に対するワークショップを行った。放課後児童クラブに通う児童は発達障害の診断を受けているため保育士が常時サポートをしながら参加させることにした。

ア　ワークショップの内容

「蜂になって　蝶々になって」という題材で、クレパスを使ったドローイング、ティッシュペーパーを使った混色遊びや割り箸を使ったスクラッチングを組

み合わせた造形遊びを通して子どもたちの自由な発想を引き出すと共に、制作途中や完成後のシェアの中で五感を通したコメントを与えることにした。

イ　子どもたちの反応

クレパスをティッシュで混色したり、重ね塗りしたクレパスを割り箸でスクラッチしたりすることに対して始めは戸惑いを見せる子どももいたが、やり始めるとどの子どもも制作に集中していた。制作途中の言葉かけに対してもそれぞれに自分の思いを語り、指導者がそれを容認することによって安心して制作に臨む様子がみられた。

図３　「蜂になって蝶になって」制作の様子

図４　完成を喜ぶ子どもたち

③　小城市立牛津小学校６年生児童（74 名）対象

・実施日：令和４年 12 月３日㈯

牛津小学校６年生２クラス（74 名）に対して卒業記念制作を目的としたワークショップを行った。大人数での実践であるために活動のサポーターとしてゼミ生（4 名）やアートサークルの学生（2 名）が参加した。

ア　ワークショップの内容

「ありがとうのハンドペインティング」という題材で「感謝の気持ち」をテーマにしたワークショップを行った。利き手ではない方の手をデコレーションするハンドペインティングであるが、全ての子どもが簡単に取り組めるということを重視した。子どもたちには日頃、目立たなくても自分をサポートしてくれている家族や友達に感謝への身持ちを込めて制作するように意識づけした。スタンプした紙は切り取り、別の色画用紙に貼りつけ「ありがとうメッセージ」を添えて卒業式に掲示することにした。

イ　子どもたちの反応

初めての体験で、最初は戸惑っていた子どももいたがやり始めると熱中し、２枚制作した子どももいた。制作中は学生のみならず担任、牛津地区青少年育成会のスタッフもサポートしてくれたために全員が完成させることができた。

○子どもの感想から

・いつもはあまり目立たない左手だけど、利き手をサポートしてくれていると思ったことがなかった。そんなことに気づくことができるワークショップだった。

・絵はかくだけで終わりじゃなくて、誰かに感謝するためにかくこともあるということが分かった。楽しかった。

○青少年育成会スタッフの感想

・とても新鮮だった。特に制作に入る前の導入の言葉が心に沁みた。出来不出来だけで作品を見ていた自分を反省した。

○校長の感想

・学生スタッフが非常によく子どもたちと関わっていた。さまざまな特性のある児童がいる中で、どの子にも寄り添いながら関わってくれている姿に感動した。ワークショップの意義にも共感でき、子どもたちにとっても保護者にとっても思い出に残る卒業制作になると思う。

先に述べたように臨床美術的なアプローチとは、単にモダンテクニック等の技法や右脳を刺激するような表現方法を体験させるだけではなく、言葉かけによって子どもたちの自尊感情を高めることも目的である。今回は小学校における「図画工作」と「道徳（心の教育）」をリンクさせたような内容となり、両担任からもやらせて良かったという感謝の声が寄せられた。

図５　ハンドペインティングの様子

図６　学級での制作の様子

⑵　保育士、幼稚園教諭に対する実践

①　西九州大学附属三光幼稚園の保育者（15 名）対象

・実践日：平成 4 年 8 月 18 日㈭

保育者（15 名）に対するワークショップを行った。造形遊びの題材や関わり方に悩んでいるという保育者もいるという状況を踏まえ、ワークショップを体験しながら題材選びや関わり方を学べるプログラムを実施した。

ア　ワークショップの内容

○臨床美術に関する概要説明

○臨床美術的なアプローチを造形遊びに生かすことの効果についての説明

○クレパスと割り箸を使ったドローイングやスクラッチングによる抽象画の制作

○お互いの作品に対する五感を生かしたシェアリング

イ　参加者の反応（アンケート結果）

■　臨床美術（クリニカルアート）への興味関心は高まりましたか。

○とても深まった	17名（95%）
○ある程度深まった	1 名（ 5%）
○あまり深まらなかった	0 名（ 0%）
○まったく深まらなかった	0 名（ 0%）

○アンケートへの記述から

・アート（造形活動）を子どもとの思いを共感することや子どもたちの自尊感情を高めることに活用することができるという発想を持っていなかった。自分にとって目から鱗というワークショップだった。造形活動のもつ可能性についてもっと学びたいと思った。

・抽象的な表現の造形遊びを通して子どもたちと豊かなコミュニケーションがとれるということを知った。「ここはこうした方がいいよ。」といった指示的な言葉かけが多かったことを反省した。五感を生かしたコメントを様々な活動の場で心がけていきたい。評価的な言葉だけではなく共感する言葉かけをたくさんできるようになりたい。

・初めての体験だった。こうでなければならないという自分の思い込みを振り返ることができたワークショップだった。子どもたちの右脳を刺激したり、自尊感情を高めたりするような造形遊びの題材や言葉かけを工夫していきたい。発達段階を意識しながら言葉かけをしていくことの大切さにも気づかされた。

アンケート結果からは、アート（造形活動・造形遊び）を通して、右脳を刺激したり、子どもと思いを共感したり、自尊感情を高めたりできるということへの気づきや、臨床美術的なアプローチを造形遊びに取り入れてみたいという感想が多く見られた。

図７　保育者同士のシェアリング

図８　完成した保育者の作品の一部

②　幼保連携型認定こども園「おへそこども園の保育者（44 名）対象

・実践日：平成 4 年 8 月 20 日㈯

園長からの依頼があり、保育者 44 名に対するワー

クショップを行った。アート活動を通した子ども理解の深まりや自己存在感（自尊感情）を高めるような言葉かけのスキルアップを図るプログラムを実施した。

ア　ワークショップの内容

○臨床美術に関する概要説明

○臨床美術的なアプローチを造形遊びに生かすことの効果についての説明

○クレパスと割り箸を使ったドローイングやスクラッチングによる抽象画の制作

○お互いの作品に対する五感を生かしたシェアリング

ワークショップを始めるにあたって臨床美術に対する認知度を尋ねたところ「ある程度知っていた」と答えた１名以外は「全く知らなかった」という回答だった。

イ　参加者の反応（アンケート結果）

■臨床美術（クリニカルアート）への興味関心は高まりましたか。

○とても深まった	41 名（95%）
○ある程度深まった	3 名（5%）
○あまり深まらなかった	0 名（0%）
○まったく深まらなかった	0 名（0%）

○アンケートへの記述から

・「じょうずにかけたね」「うまいね」といった技術面を評価するような言葉かけに何の疑問も持たずにいた自分に気づかされた。できあがりを評価するだけの言葉かけではなく、それぞれの子どもが表現した作品をもとに、問いかけたり共感したりすることが大切だと気づかされた。

・造形活動に対する苦手意識があったが、それは何かをうまく表現できるようにさせなければならないという思い込みによるものだと分かったような気がする。幼児期にはさまざまな表現技法に出合わせ楽しませたい。これまで知らなかった臨床美術に対する関心も高まった。

アンケート結果からは、保育者自身の造形活動に対する苦手意識から偏った教材を多く与えていたことへの反省や、評価者ではなく共感者として子どもと対峙することの大切さに気づかされたという感想が多かった。

③　保育所型認定こども園「武内保育園」の保育者（25名）対象

・実践日：平成４年10月１日㈯

園長からの依頼があり、保育者25名に対するワークショップを行った。臨床美術的なアプローチを造形活動に生かす意義や期待される成果について講話を行った後で、造形遊びを体験したり、保育者役と子ども役に分かれて言葉かけのシミュレーションを行ったりする中でスキルアップを図るようなプログラムにした。

図９　　制作する保育者①

図 10　制作する保育者②

ア　ワークショップの内容

○臨床美術に関する概要説明

○臨床美術的なアプローチを造形遊びに生かすことの効果についての説明

○クレパスと割り箸を使ったドローイングやスクラッチングによる抽象画の制作

○お互いの作品に対する五感を生かしたシェアリング

イ　参加者の反応（アンケート結果）

■臨床美術（クリニカルアート）への興味関心は高まりましたか。

○とても深まった	21名（85%）
○ある程度深まった	4 名（15%）
○あまり深まらなかった	0 名（ 0%）
○まったく深まらなかった	0 名（ 0%）

○アンケートへの記述から

・子どもの立場になって造形遊びを疑似体験することによって、苦手な子どもがどのような気持ちで造形遊びに参加しているのかという気持ち

が分かった。「絵が苦手な保育者は、絵が苦手な子どもの気持ちが分かるということ」という講師の言葉が強く心に残った。それぞれの子どもの特性があるという当たり前のことを忘れずに支援していきたい。
・幼児期には、さまざまな体験や技法に出合わせ楽しませたい。そして子どもたちの思いに寄り添いながら言葉かけをすることによって豊かなコミュニケーションがとれるようになっていきたい。
・五感を通したコメントというキーワードが新鮮だった。やみくもに褒めるだけではなく、子どもたちが理解できる言葉で対話する力も身につけたい。臨床美術に対して興味が高まった。

図 11　保育者同士のシェアリングの様子

4　実践研究の成果と課題

今回は、放課後児童クラブ「児童発達支援放課後等デイサービス」ippo（小城市）、幼保連携型認定こども園「おへそ子ども園」（佐賀市）、小城市立牛津小学校（小城市）の子どもたち、そして西九州大学附属「三光幼稚園」（佐賀市）、幼保連携型認定こども園「おへそ子ども園」（佐賀市）、保育所型認定こども園「武内保育園」（武雄市）の保育者を対象に臨床美術的アプローチを生かした造形活動のワークショップを実施した。

実践研究の目的であった「①園児、小学校児童への臨床美術的アプローチを生かしたワークショップを実施することにより子どもの自尊感情を高める」「②保育士や幼稚園教諭に対するワークショップを通して、臨床美術的アプローチを生かした造形活動への興味関心を高め造形教育に係るスキルアップにつなぐ」の二点については、参加者の活動の様子や完成作品、子どもたちや保育士、幼稚園教諭、関係者等への聞き取りやアンケートの結果等からそれぞれ概ね達成できたと思われる。特に保育者の臨床美術に対する興味関心の深まりが８割を越えたことは大きな成果であるととらえている。

今後の課題としては、子どもたち対象のアンケートを工夫することで、心の変容を更に具体的に探ってみたい。また更に多くの園や各種学校においてワークショップを行うことで、臨床美術的アプローチを生かした造形遊びや図画工作に対する意識や実践の広がりを図っていきたい。

備考

上記以外でのワークショップ実施履歴及び予定
・2022.7.8　西九州大学短期大学部　介護福祉コースワークショップ（短期大学部美術工芸室）
・2022.8.4　さがサポートセンター認知症予防ワークショップ（佐賀市「いきいき館」）
・2022.8.28　ビッグアートフェス（佐賀県庁県民広場）
・2022.10.6　小城市立三里小学校２年生ワークショップ（当該校）
・2022.12.3　小城市立牛津小学校６年生ワークショップ（当該校）
・2022.12.4　エビス祭（旧松枝酒造跡ギャラリー）地域イベントワークショップ
・2023.1.18　生きがいづくり教室①ワークショップ（学内生涯学習センター）
・2023.1.25　生きがいづくり教室②ワークショップ（学内生涯学習センター）
・2023.1.19　小城市立砥川小学校６年生ワークショップ（当該校）
・2023.2.19　小城市親子ふれあい子ども祭りワークショップ（牛津町公民館）
・2023.2.25　唐津市立高島小学校６年生ワークショップ（当該校）

本文中に使用される園名、学校名、団体名及び画像については全て当該機関代表により公表の許可を得ている。

参考文献

１）宇野正威：認知症医療と芸術のコラボレーション，臨床美術（2013），（金剛出版）
２）金子健二：認知症治療としてのアートセラピー，臨床美術（2018），（日本地域社会研究所）
３）厚生労働省：保育所保育指針（2017）
４）文部科学省：幼稚園教育要領（2017）
５）内閣府・厚生労働省・文部科学省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2017）